バーミリオン（暁）

紅碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バーミリオン（暁）

【Ｎコード】
Ｎ８２７７Ｙ

【作者名】
紅碧

【あらすじ】
西暦３０８８年　１２月。土星のロボット会社が造った感情ロボットで、バーミリオンという機種の欠陥品が、反乱を起こす。

天王星　西暦３０８８年　１２月

暁に光を、、、。彼らは夜明けに向かってひたすらそう、願った。
バーミリオンに輝く灼熱の太陽に向かって、、、

「ちょっと出張にいってくる」
「どこ？」
「ケンタウルス座アルファ星の第３惑星。日帰りだから、夜遅く帰るから、メシたのむね」
「そう。気をつけてね。いってらっしゃい」
（家政婦ロボットのアンジェラの料理は十分おいしいんだけど、なぜか彼は私の手料理を食べたがる。血も涙もないロボットよりも温かみを感じるんだそうだ。嬉しんだけど、何にしようかなあ。そうだ、昨日から、今日食べようと思って煮込んだビーフシチューがあったけ。あれと天王星の宇宙航空センターのデパ地下でおいしいもんでも買ってこよう）
シルビアは仕事用の黒の宇宙艇で空に飛び立った夫ブラック・ハイトを送りだした後、新聞に目を通した。
（今日はとっても寒い。だって空があんなに青くて高いんだもの。雪だって、あんなに積もっている。後で、雪かきをアンドロイドのトビーとロボットのアンジェラにたのまなくちゃ。レオンがいたころはよかったなあ。ほんとに気がきくやさしい犬だった、彼は。お互いに、結婚して幸せで、よかったんだけどね）
―坊ちゃまの、「天然」のところが私は好きですー
眉目秀麗の美青年執事はいつものどかな含み笑いをしていた。

（レオンに、いつかそんなこと言われたっけ、、、。
「天然」ってどういう意味だろう?天然素材ってこと?意味わからない）

「あれっ?」
バラードが占いのお店を開いている。どこ?新聞の片隅に広告で結構大きく載っている。
「天王星。アルフォード市７９１。ふーん。バンド活動やめたんだ」
占い店の名は「夢水晶の館」。占いかあ。そういえば、彼は予知夢が見れたんだっけ。
「行ってみようかなあ。ずっと会ってないし」
シルビアは、今日の外出は、男装することに決めた。太陽系連合主席とその息子である夫。夫が勘当までされるほどの２回目の二人の大げんかの後、跡を継がないで叔父の息子の従兄ロバート・ハイトが次期主席になる予定になったのだが、一応、現主席のジュニアの奥方なので僻地の冥王星ならともかく、天王星まで出かけるとなると、世間一般に、貌が割れるとまずい。調査局に一緒に務めたかったんだけど、やっぱりそういうわけにもいかないらしくて、、、私がもと実験体の天使族という理由ではなく、貌が割れると騒がれるという意味らしい。たまに、秘密機構Ｚの方にかりだされるくらいだけど。婚約パーティーと結婚式と臨時のロックバンドのバイトの時は、素顔が全くわからないほどの化粧でみごとに化けていたから、今のシルビアを見ても、世間様には誰にも気づかれはしない。
「少年、シルバーにもどるとするか、今日は」
まっいいか。私はあまり深く考える性質(たち)ではないのだ。
「、、、訓練所時代の格好に戻ろう。じゃないと動きにくい」
バラードの店行ったらきっとなにか手伝わされるに決まってる。動けなくちゃダメだろう。きっと歌って踊れる楽しい占いの店にちがいない。
―おまえはいつだって自分の都合のいい方にしか考えないー

夫ブラックの声が心によぎったが、「天王星のデパ地下でおいしいもん買って帰ろう」と別の楽しみにすりかえてしまえるホントに都合のいい性格だったため、これから先に起こる事件の予兆など、なにも考えない天然ボケぶりのシルバーであった。

どうしてもついてくるといってきかないロボットの執事トビーを従えて、シルバーはディーンオーナーのバラードの占い店「夢水晶の館」にやってきた。黒服姿のトビーは店の前で待機してくれている。ディーンとバラードが結婚したのはつい1か月前のことだ。傍目は、男同士の彼らはＢＬ婚と友人同士の間で通っているが、バラードが両生体の天使族のままでいたがっていることをずっと前からシルバーは知っていた。愛する男と結ばれたというのに、なぜかバラードは１８歳を過ぎても、男女の性を選んでいないのである。（ここからは男装しているのでシルビアではなくシルバーで記す）

「火星の店から天王星に店移転したんだってね。いつ結婚したの？」

「先月」

「バラードは僕と違って、結婚しても、天使のままだよね。どうして女にならないの？」

「俺さ、おまえと違って天使同士の両親から生まれたんだけど、生まれてすぐに捨てられたんだよね、火星の乳児院の前に」

「僕も親に捨てられたけど」

「おまえはやさしいジュニアとヒューマノイドサイボー犬のおっさんがいて、ゆうふくだっただろ？俺は、ずっと孤児院で育ったんだ」

「、、、そうなんだ」

絶句するシルバーにバラードは、曇った真面目な貌になる。

「親子の情ってもんが信じられないんだ。子供持つ気ないし、普通の男女の恋っていうか、夫婦ってもんもわからない。ディーンは今の俺のままが好きって言ってくれるから、これでいいんだ。コーヒー冷めるから飲んで」

「いただきます」

シルバーは薄暗いバーミリオン（朱色）のライトの下、店の中で、出されたコーヒーを飲みはじめた。料金はらうよっていったのだが、バラードは、今日は手伝ってもらうからいいという。

「占いの店なんだけど、ランチタイムだけに簡単な食事も出すんだ。音楽喫茶ってことで夜は俺はピアノで生演奏もする。ディーンは日中限定で警備会社でアルバイトしてるんだけど夜はこの店のオーナーにもどって接客している。たのみがあるんだけど、シルバー、バイト代払うから今日のお昼時だけでいいから、手伝ってくれないか？いつものアンドロイドの店員が休んでて1人足りないんだよ。おいしいまかない出すから。今日のバイト代3時間分3000宇宙ドルも払う。ランチタイム終わる、2時くらいまでいい？」

「、、、いいよ」

ブラックは今日は夜遅くなるっていってたし、その頃くらいから帰宅しても夕食の支度は十分間に合うはずだ。

「サンキュー助かるよ。じゃ、俺、お客さん、占ってくる。奥の3番の部屋にいるから、ランチメニューと飲み物オーダーランプついたら、ランチと飲料用トレーから勝手に出てくるからそれ取って、ランプのついた部屋に運んでくれる？食器もトレーも全て使い捨て容器だから、かたずけはしなくてもいいように部屋のダッシュカートに捨てるシステムだから。」

「わかった」

バラードは上から、エキゾチックな裾の長い占い師風の青藍の衣裳を身にまとい、様々な色の宝石の施されたネックレスや指輪などのアクセサリーをつけた後、（どう？似合う？）とテレパシーで聞いてきた。

（うん、すごく似合う。バラード店長、そうやって「いんちき商売」で、人、騙すんですね。ずいぶん儲かるでしょう？）

（騙すんじゃないよ。幸せをわけてあげるのさ）

ウインクすると、バラードは「じゃ、いってくるよ、ハニー」と、奥の3番に消えた。

ハニーって、、、。ディーンという、だんながいながら、、、。僕たちはカップルじゃなくて、親友だろう？

シルバーは控室（ロッカールーム）で店専用の淡い朱の執事服に着替え終わると、５番とランプが光る、別の部屋へと、コーヒー付きハンバーグランチセットを運びに行った。

「いらっしゃいませ」

シルバーが５番の部屋に入るとそこは、オレンジの光に包まれ、すべてイエロー系の装飾に施されていた。テーブルの上にランチセットと飲み物のレモンジュースを置くとソファーに腰かけた白いフリルのついたドレスを身にまとったゴスロリ姿の長い巻き毛の金髪の１５か１６くらいの美少女が、「あら、シルバーじゃない？」と素っ頓狂な声をあげた。

「えーっ？」思わずトレイをひっくりかえしそうになったシルバーが振り返るとそこにいたのは、火星のシェイラ研究所隣接のエスパー訓練校Ｚコースで秀才と謳われたマリア・ミカエルであった。

「こんなところでバイトしてたんだ。いいの？ジュニアに叱られるよ」

「しっ、他の人には黙っててね。お忍びで来たんだから。たまたまバラードの店に遊びに来たら今日だけアンドロイドの執事が休みだったから僕が手伝うことになったんだよ」

「アンドロイドのジェイクかな、、、そういえば今日この店に入った時見かけなかった。会いたかったのに。残念。彼の占いホントあたるんだよね」

「機械人間のアンドロイドにも占いできるの？」

「アンドロイドには珍しい、まれなエスパーだって話よ」

マリアは鞄の中から、１枚のフォトを取りだした。アンドロイド・ジェイク４８９号と記されたその鉛色の貌は、シャープで整い過ぎてはいたが、機械にしては人間に近すぎる表情をしていた。理知的な科学者といったインテリジェンスな美青年だ。目の色は、、、。

自分が尋ねるよりも、いち早くマリアは答えた。
「バーミリオン。朱の色よ。オレンジとも言うわ。幸運を呼ぶ色なんですって」
シルバーはマリアにフォークやスプーンなど食器を並べて用意しながら、尋ねる。
「マリアはよく、ここに来るの？」
「今日はバーミリオンの日だから、来たの。夜明けの日とも言うらしいわ。月1回の、占いの祭典の日」
「占いの祭典？」
「バラードがそう名付けたらしいんだけど、この日は占いの勘が極まる日らしくて、宇宙の多くの占い師が夜集うらしいの。天王星の衛星＝月が満月になるのとも重なって、未来も予言できるとか」
（ああ、またわけのわからない話になってきた）
シルバーは心中、頭をかかえる。
（でも、なんか興味あるな。こういう話を、別の仕事でたまに宇宙船の設計なんかやってる理系のブラックがきいたら「気、狂ってるな」と一言、吐き捨てるように捨てゼリフ残して帰るんだろうけど、女子ってこういう未知の力とか、魔術的なものにどうしても魅かれるんだよね）
「シルバー、全部聞こえてるわよ、私、エスパーなんだから、あなたの考えてること全部読めちゃった」
「失礼な。一言読むからって断ってからにしたら？」
「エスパー同士で失礼もなにもないでしょ。油断して心を解放してる方が悪いのよ」
見た目超可愛いのに、マリアの性格は反比例するかのように、最悪だ。
なんてぶしつけで無神経。このずけずけしたもの言い、傷つく。
「正直でまっすぐって、ほめてよ、シルバー。あなたのことホントは好きだったのに。女になるなんてサイテー」
「昔の僕がもしそれを知ってたとしても、きっぱりとお断りします」

「ふん」
マリアはハンバーグランチを黙々と食べ始めた。
「ここのランチ、いつ来ても、おいしい」
「ありがとうございます。誰を指名するの？」
「ジェイクが休みだったら、バラードかな。私、ＢＬは嫌いなんだけどしょうがないわ」
「それ、きいたら激怒するよ、きっと」
「怖くないもん、別に。だって私お客さんだし。バーミリオン・ライトの日なのにジェイクが休みだなんて、がっかり」
「普段は店内の灯り、何色なの？」
「青よ。だってバラードの髪、空色でしょう？」
「たしかに」
シルバーは自分がここに来た日が偶然とはいえ、朱の集いの日に当たったことに、何か不自然なものを覚えた。
予知夢でバラードがもしこのことを予知していたとしたならば、自分の未来の役割は何なのだろう？未来にこれから起ころうる事実を確かめなければ。
次の順番を待つマリアの部屋を後にしたシルバーは何か得体の知れない不安を感じるのだった。

バラードの店の今日のまかないは、オムライスだった。店のカウンターに二人で並んで、学生時代の頃のように、仲良く食べている。
「きちんとしたオムレツが、おいしいデミグラソースと一緒に、チキンライスに乗ってる。すごいね、本格的だね。オムレツ２つに綺麗に割れてるじゃん」
シルバーはご機嫌だった。だいたい、やせの大食いとまで言われた訓練校時代から、グルメ思考のこの天使族は、食についてはうるさい。
「だろ？」
バラードも同じものを食べながら、満足げだ。

「優秀な料理ロボットを使ってるからね。そうそう」
バラードがこっそり囁いた。
「今日の客、アンドロイドのＯＬだったんだけどちょっと占ったらやばい未来が見えたんだ」
「やばい未来？」
アイスコーヒーを飲み終えたシルバーは翡翠色の大きな瞳で、親友の青の双眸を覗きこむ。
「なにそれ？だいたい客のには悪い未来は教えないってモットーでしょ？占いはいいことだけ信じる。そういうキャッチフレーズの店だって、、、」
「そうだよ。そうしないと、店は繁盛しない。いいことだけを強調して客に希望を与えて信じ込ませる。反面、悪い未来は少しだけ注意するようアドバイスするだけだ。未来を変える力までは予言占い師にはない。でも、本人に真の道を案内することはできる。道を選ぶのは本人しだいだけどね。だからおまえだけに教える。この惑星の未来の道筋なんだ」
「天王星がやばいってこと？」
「そう」
「おいっ！冗談はよせ」
「アンドロイド反乱集団が、テロを起こす。明日中に、だ」
「じゃ、今夜の集会は？どうするの？」
「仲間を結集して開く。力が必要だからな。みな全員エスパーだ。夜にはディーンも、店員のアンドロイドのジェイクもここに来る」
「僕も手伝う」
「だめだ。バイト代渡すから、それ持って今すぐ冥王星に帰れ」
「どうして？能力封じのブレスレットつけてても、ある程度、力は使えるよ。弱いけど」
「おまえを危ない目にあわせたら、ジュニアが泣くだろ？」
「、、、バラード」
「帰って、ジュニアに伝えて、応援を連れてきてくれ。俺は彼らを

食い止める」
「わかった。ありがとう、バラード。でも危険になったらすぐブレスレットで連絡くれ。すぐかけつけるから」
「了解」
シルバーは後ろ髪引かれるような、不安な気持ちながらも、執事ロボットのトビーとともに、覆面宇宙タクシーにのせられ、空へと飛んだ。航空宇宙港まで、シールドを張った高速チューブ内を滑るように宇宙艇（タクシー）は走り去った。

夕方。天王星宇宙空港局通路から、シルバーはトビーの傍らで、アルファケンタウリ第３惑星の調査局出張所にいるブラックにコンタクトした。緊急事態以外は仕事中、連絡してはいけない約束なのだが。
「、、、出ない」
シルバーはがっかりした表情でトビーを見上げた。鋼鉄色のトビーは目の大きなやさしげなロボットで黒服の執事スーツが似合っている。
「奥様、メールをとりあえずお入れなさった方がいいのでは、、、緊急事態ですし」
「そうするか」
スリムなライムグリーン系のカジュアルパンツに麻の白シャツ姿の少年シルバーは、右手のプラチナ製のブレスレットに一瞬念じて事項を入力すると、シャツの袖で隠した。ブレスレット中央に埋め込まれたエメラルドの煌めきが袖口から煌めく。
透き通った長い銀髪が、ロビー内にときおり吹き込む風で光り輝く。１２月とはいえ、天王星は惑星全体を巨大ドームで覆い尽くされた、春のように温暖な気候のまま一年中穏やかなのだ。
ふと、通路の向こう側の人影に、シルバーは、おやっ？と目をこらした。

背中までまっすぐに垂らしたみごとな金髪。すらりと伸びた体躯を紅のスーツでつつみこんだ、玲籠した美青年。そして、どこか物憂げな琥珀の瞳。見覚えのあるその顔は、忘れもしない。

「レオン！」

シルバーは通路の向こう側のレオンハルトに呼びかけ、手を振った。雑踏の人影の中にいても決して見失わない。愛情を受けて育った子供は強いとなにかで読んだことがある。シルバーはそういう子供だった。かつて、結婚する前の。レオンの知っているシルバーは。

「、、、坊ちゃま、、、！」

レオンは驚いたのと同時に懐かしさと、嬉しさの混じった複雑な心境に動揺した。

―変わってない。ちっともー

それは、レオンの知るほんの何年か前のシルバーと変わりなく、しなやかなスリムな肢体の少年風美少女シルビアだった。

「レオン、教えて」

シルバーは人目を気にせず、レオンに呼びかけた。二人に距離があるのは、シルバーたちは冥王星行き、レオンは次に乗る木星行き宇宙船に乗るため、各々別のゲート前にいたからだ。

「なんですか？」

「いつか言ってた、天然ってどういう意味？」

レオンがプッと笑いをこらえると同時に、シルバーの身体が宙に浮いた。

「アーッ！」

少年姿のシルバーは宙に開いた暗闇の空間に引きずり込まれていく。

「トビー、、、！レオン、、、！助けて！レオン！レオーン！」

叫び声もむなしく、シルバーの姿は霧のごとく掻き消えた。

「坊ちゃま！」

「奥様！」

レオンとトビーは同時にかけより助けようとしたのだが、もはや、間に合わなかった。

「なにがあったの？」
「、、、なんだ？」
一瞬、黒い人だかりの山ができたが、数秒後にはなにごともないかのように彼らは散り散りになり各々の目的地に向かって消えて行った。
「ここにいた、この現場を目撃した他の連中に記憶操作が行われたらしい」
ヒューマノイドエスパーのレオンがテレパシー透視し、トビーに囁いた。
「君は機械だから、その操作はきかないだろう？」
「当然です」
「、、、大変なことになった。大至急、ハイト調査局庁に知らせなければ、、、」
レオンは暗澹たる心のまま、右手の琥珀付きの銀のブレスレットを覗きこんだ。
「私だ。レオンハルト少佐だ。ブラック・ハイト調査局長につないでくれ」

天王星の北部に異変が起きたのは、その数時間後のことだった。
「あれはなに？」
農婦が山の向こう側に現れた、宇宙空間を指さした。
「あれは、宇宙（そら）だ。むきだしになっている」
碧空にぽっかりと現れた暗黒の空間。星星の煌めきも向こう側から透けて見える。
「大変だ」
収穫中のトマトときゅうりを放り出し、二人は顔を見合わせ、一目散に家路へと急いだ。とにかく帰ろう。逃げなければ。子供が、父母が心配だ。
二人は手を取り合って山道を駈け下りた。が、その瞬間。

「あなたっ！」
妻が空を指さした。そこには大きく羽を広げるまっ白な蝶が二人を巨大な体で押しつぶそうとしていた。
「レイナ！」
夫が妻におおいかぶさるようにした瞬間、天王星アルテミラ地区は、全てを消失した。爆音とともにその広大なエリアは破壊され、消滅してしまったのだ。ほんのわずか、まばたきする間に。一瞬のうちに。

「予知できなかった？」
「ああ。夢に出てこなかった。なぜだかわからない」
「まっ仕方ないな。予知夢なんか不安定なもの信じないで、占い師返上して店をたたむんだな」
「あんたの奥さんだっておんなじだろ？霊感能力はずれたんだから」
「ルビーの霊感も確実ではないからな。似たようなもんか」
「それにしても、太陽系連合軍の到着すら間に合わなかったくらい、一瞬のことだって話だぜ」
バラードは、かろうじて難をのがれた自分の店で、カウンターテーブルにレオンと並び合っている。執事のトビーは人間と同じ感情を持つアンドロイドではなく、ロボットなので、洗脳されていないため、冥王星に帰路につかせた。
「感情を持つエスパーのアンドロイドが指揮を取っているという噂が流れている。バラード、きみの店にオレンジ色の瞳で、シルバーグレイの皮膚の青年従業員がいなかったか？」
レオンは疑似飲料のコーヒー缶をぐいと飲み干し、「おかわり」とうながした。
「犬のおっさん！」
バラードがうろたえながら新しいコーヒーをさしだし、レオンは受け取った。すこぶる不機嫌だ。

「私は人間なので犬はよけいだし、おっさんとは失礼だな」
「ジェイクっていうアンドロイドの占い師を雇っていた。まさかあいつ？」
「そうだ。まれにみるアンドロイドのエスパーだそうだな」
レオンは、琥珀の埋め込まれた右手の銀のブレスレットを少しかたむけ、浮かび上がる立体映像を指差した。
背の高い逞しい体躯の白衣の青年が映し出された。たそがれた夕焼けのように激しいオレンジの双眸が印象的だ。
「ロボット3原則を踏まえて製造されているとはいえ、感情があるアンドロイドは感情のないロボットとは全く別ものだ。また我々、完璧に人間とはいかないが、サイボーグたちとも違う」
「俺ら天使族も、違うぜ」
「彼らには反乱分子のエスパーがカンでいる。私は軍で彼らを制圧する」
「レオン、俺はどうすれば、、、」
「アステロイドベルト・ゼロにきたまえ。もともとメンバーなんだから。シルバー坊ちゃまを探さなくては」

目覚めた場所に気が付き、辺りを見渡すと、そこはどこなのか、非現実な機械類に囲まれた実験室のような部屋だった。なぜか身体の感覚が麻痺して動かない。
「気がついたかね？」
５０歳くらいのおちついた感じのグレーのスーツ姿のロボットの紳士が目の前にいた。白一色の病室のような部屋のベッドにシルバーは寝かされていた。右手首の能力封じのブレスレットはつけられたままだ。
「人間というものは実に下等な生物だ。君たちは実験材料だよ。われわれ理性的な創造主から見ればね」
「下等生物ですか。でもあなたがたをつくったのは我々の仲間です

よ」
「作られたという事実だけだ、それに何の意味もない」
そう言い放った後、彼は背後を振り返った。
「ジェイク」
シルバーは息を呑んだ。そう呼ばれた青年の貌は、あの銀白色に煌めいたアンドロイドのものだったからだ。バラードの店の客、マリアの持っていたポートレートにある端正な銀色の顔のアンドロイドは、バーミリオン＝朱に輝く双眸でこちらを見つめた。肩まで伸びた長い髪は太陽のごとくオレンジ色に煌めいて見える。
「ジュニアのパートナーですよね。知っています。たしか天使族だったとか」
「あなたは、バラードの店の従業員だったんじゃ、、、」
「そうですよ。でもそれはカモフラージュです。私のもう一つの名は暁というのです」
無機質の声が続けて言った。
「別名バーミリオン。テロリストなんです」
「犯罪者だったんだ」
「革命家と呼んでください」
「革命？人殺しにそんな名前つけられない。きのうの天王星の事故はあなたの仕業でしょ？」
シルバーは瞬時にジェイクの思考を読み取り、事実を知ったのだ。感情を持つエスパーのアンドロイド「ジェイク」に、一瞬、緊張が走ったかのように思えた。それは錯覚かもしれないが。
「そのとおり。やはりあなたはたぐいまれな能力を持つ人だ。もと、天使族だっただけのことはある」
「なぜ、こんなことをするの？罪のない人々を、簡単に殺したりしないで」
身体全体が麻痺状態のシルバーは必死に言葉だけを、吐き続ける。
「あなたに、たずねたいことがある」
「なに？」

「愛とはどのようなものなのですか」
「愛？」
「人間だけに許された感情だと聞きました」
それを、創造主人間御手洗潤博士は、この感情を持つ機械に、教えることができなかった。伝えられないまま、彼らに殺され、死んでしまった。
「言葉では説明つかないよ」
「具体的に具象化できないものですか？」
「、、、そうだよ」
シルバーは目を閉じて深い眠りについた。薬が体中を回っていく。薬物漬けで宇宙の海に沈められるのかな。ふとそんな思考の影に、
「だから言っただろ？自分の都合だけで物を考えるからだ」と、切れ長のやさしい瑠璃の双眸がよぎっていった。

ハイト家の執事トビーと家政婦アンジェラは機能停止し、ぶっ倒れているところを、夕方に、アルファケンタウリ第３惑星宇宙船開発研究所から、帰宅したブラックに発見された。彼は調査局ではなく、宇宙船開発の仕事先に日帰り出張していたのだがいつもよりかなり早く仕事がかたづいたので、調査局にはよらずにまっすぐに帰宅したのだった。午後５時のこと。
「なんだこれは？」
冷めた鍋に入った昨日煮込んで作られたらしいビーフシチューを温めなおしながら、ライス機から白米を盛りつけようとした彼は、憤慨した。メシができていない。その理由でだ。食い物の恨みは恐ろしいとはこういう人物をさすにちがいない。おいしいものをおいしく食べなければ、彼はがまんならないのだ。
「電気が止まっている。なぜだ」
ライスが冷たい。鍋のシチューはかろうじてガスだったため、温まったので冷たくさめたライスに熱いシチューをかけ、彼はホット

ウイスキーとともに夕食を取った。食材が無駄になった。
シルビアは「天王星のバラードの占い店夢水晶の館にいってきます」と書き置きしただけで、まだ戻らない。トビーとアンジェラ壊れていないが電力オフで機能停止中だ。
ブレスレットの緊急連絡光がしらせたため、調査局に、レオンハルトから、緊急連絡が入っているそれを、ブラックは確認した。血相変えて固まった彼は、頭をかかえる。
「、、、ええい、役にたたん奴らだ」
この場合、奴らとは、レオンとトビーをさす。一番の役立たずは、妻シルビアのはずなのだが、動揺し混乱し、冷めた夕食に憤慨したブラックの怒りは別のものに向けられたいた。シルビアの身を案ずる彼は夕食どころではなくなり、心底疲れを覚える。とにかく大変な事態にある。
「機械に分際で人間にはむかおうとは、ゆるせんやつらだ」
彼はとりあえずまずい夕食をすませると、「ダークスーツ（普段の仕事着）」から、「黒の軍服（極秘任務時着用）」に着替え、仮眠もとらずに再び、小型宇宙船に乗りこんだ。先ほどとは違い、いくつもの武器を装備し、土星に進路を取る。だが、極秘任務とはいえ、レオンとバラードに連絡し、落ち合う地点を確認するのを忘れはしなかった。単独行動を避けるためだ。

アンドロイド製造会社（株）サターン　商品開発室　土星テオ２８７－０４地区

土星にはサターンの他にロボット、アンドロイド、サイボーグ産業を営む会社が数多くある。その中でも、最も大手で利益上昇中なのが、感情ロボットであるアンドロイドを初めて製造可能にし特許を取った、（株）サターンであった。
天高く聳え立つ金色のほっそりとした美しいビルの最上５００階に、

彼は通された。
来客用の応接室に入ると、5分ほどしてから、グレースーツの人物が現れた。
巷では、海王星のスター大学院教授で博士号を持ち、アンドロイド開発研究で第一人者でもある御手洗潤博士で、サターン専属の客員教授でもあった。
「お尋ねしたい。あなたの開発されたアンドロイドG－008Rなのですが、欠陥品がみつかったのは、いつでしたか？」
率直に話を切り出す、太陽系連合軍軍服姿で現れたブラックに、相手は恐縮した。不可解な怒りのためか、黒衣の美青年は、魔術師のごとく恐ろしく見えた。
「も、、、申し訳ございません。極秘任務でいらっしゃったとは存じませんで、お待たせしてしまって」
「そんなのはどうでもいいです。いつですか？」
「3か月ほど前です。きちんと処分したはずなのですが」
「どういう理由で？」
「自らの意志を矯正することが不可能な個体だからです。人間に奉仕する役割よりも自分の思想を持つエスパーのアンドロイドなのです」
「そのため原子分解して破壊したと？」
「そのはずだったのですが、どうも手違いがあったようです。彼はその寸前に脱走しています。ただ、会社側も、ロボット3原則をきちんと踏まえていた製品なので、人間に危害は加えないという理由から、捜索中だったのですが、あまり心配はしていませんでした。毎年そのような欠陥品が2、3体脱走することはあるのですがたいてい土星を脱出できず、関門で宇宙警察に破壊されます。バーミリオンもいずれそうなるだろうと我々はたかをくくっていました。1日分のエネルギーを供給できず、それがつきれば自然に息を引き取る仕組みですから」
「絶対という言葉はこの世には存在しません。あなたがたの会社を

監査してきた私たちにも責任がある。このままだと、賠償額は膨大になるかもしれない」

「本当に申し訳ございません」

「無意味な殺人、殺戮を、とにかくここで食い止めないと、大変なことになる。私の妻も、どうやら、彼らに捕らえられているらしい」

４５、６歳くらいの開発チームリーダーの御手洗（みたらい）潤博士は、黒衣の軍服姿のブラック・ハイト調査局長に、「どうぞ」とコーヒーをすすめた後、手元のモニターのスイッチを押した。

モニター画面に一体のアンドロイドが映し出された。

「別名バーミリオンといいます。彼は私が設計して開発チームのメンバーたちと造り上げた最高傑作でした。頭脳、感情機能全て人間そのもので、エスパーであり、ロボット３原則を踏まえたはずが、一部ミスがみつかり、処分されることとなりました。彼は自らの意志で自分を『暁あかつき』と名乗っていました」

「天王星のある占い師の店でアルバイトしていたアンドロイド店員が酷似している。彼が一昨日、天王星北区農場地域ＲＳＳ２２３を破壊したテロリストかもしれないと、太陽系連合はマークしているのだが。なぜ、彼を逃がしたのか、その理由が聞きたい」

ブラックはコーヒーには手をつけず、左手首のブレスレットをかざした。瑠璃の煌めきが青く光って見える。

「この宇宙を牛耳りたかったからか？君は人間のはずじゃないのか？アンドロイド、人間、どちらの味方だ？」

御手洗博士はロマンスグレーの長めの髪を右手でかきあげながら、困り果てた様子で、頭をかかえこんだ。

「逃がしたのは私ではありません。副社長とその手先です。私の力ではどうしようもない事態に陥ってしまいました。社長も副社長も、幹部たちも、皆、思考操作されて、この惑星全体が、エスパーでありアンドロイドである彼らに支配されかかっています。この現実をあなたにどうしても伝えなければならない。あなたの奥様はおそらく土星の地下組織にいらっしゃると思われます。私１人がなぜ、記

憶操作されなかったのか、その理由は」
「君は人間であり、エスパーだから?」
「そのとおりです。バーミリオンを、暁を、どうか破壊してください。私はとんでもない魔物をつくってしまいました」
ブラックの左手首につけられたブレスレットの青い煌めきが菫色に変化した。
「あなたは嘘をついている。あなたそのものの意志で、この惑星を動かしているはずだ。中枢に案内してくれないか?」
突っ伏している男が貌を上げたと同時に、天井から、オレンジ色の煙が湧いて出てきた。オレンジと白煙につつまれた御手洗博士は、貌のベールを剥ぎ取った。
銀色に輝く整った横顔に、オレンジに輝く美しい長い髪。朱の瞳を認めたブラックは、「ようやく正体を現したな」とほくそ笑んだ。
だがー。
敵の姿は霧のごとく掻き消えていた。魔術師のごとく、多数の貌を持つアンドロイドのエスパーは去って行った。
(これを設計したやつは天才だな。機械とは思えん。御手洗博士はおそらく、この世にはいない)
人影の消えた応接室に立ちつくすブラックは心でそう呟きながらも、顔は色をなくしていた。
あいつは一体どこにいるんだ。
彫の深い青年の横顔には苦渋と疲れが、色濃く現れていた。
とにかくここからはなれて、別のやり方で早いうちに手をうたなければ、、、。
背後から、何頭か犬たちの鳴き声がきこえてくる。同時にレーザー銃の音がし、部屋に彼らがなだれこんできた。
サイボーグ犬たちを放したのだ。ジャックラッセル型の大型サイボーグ犬たちが15頭。
「またずいぶんとしつけのいきとどいてない犬たちだな」
ブラックは左腕のブレスレットをかざし、シールドでレーザー攻撃

をブロックすると、氷のような青紫の瞳で犬たちを一瞥しただけで、粉微塵にした。機械がくだけちりバラバラになったその肢体に、彼は、「ごめんな」と捨てゼリフを吐き、部屋をあとにした。

「すべてのエネルギー供給をブロックさせる」

アンドロイドジェイクにより太陽系全土に宣言された事項は、全人類を凍りつかせた。

御手洗潤博士の創ったアンドロイドジェイクは、エスパーだったため、その力を駆使し、周りの人間たちとアンドロイド、ロボットたちを次々と取り込み、思想操作しながら、サターンと土星全体を洗脳していった。

太陽系連合主席は、全惑星軍を配備し、事態に向けて立ち向かったが、人間はもとよりロボットも、あまりにも無力で立ち向かうことすらできない有り様だった。ごく少数のエスパー、天使族、エスパーのヒューマノイドサイボーグたちが、かろうじて、戦力になりうる、現状だった。というのは、人間は思想操作され、ロボットは機能を停止される状態となってしまう、つまり、エスパーであり、機械類を支配し得るアンドロイドたちの向かうところに敵はなかったからだ。

「ガニメデに進路をつなぐ」

ジェイクを追って、取り逃がしたブラックは、バラードとレオンハルトと土星宇宙局でおち合い、敵の本拠地木星の第3衛星ガニメデに向かうこととした。自家発電機能を使う旧式の宇宙船だが、このさい仕方がない。

「軍はあてにならんな。秘密機構らしく単独行動で我々はいくしかない」

後部席で無言の二人にそう指示してから、彼はハイバードライブに

切り替え、目的地へと向かった。

「ねえ、バーミリオンって、暁って、なんていう意味か知ってる？」
薬物のため、全身が麻痺状態でカプセルに閉じ込められたシルバーは、その扉が閉められる寸前に、オレンジの燃えるような髪のアンドロイドにテレパシーで話しかけた。
「いえ知りません」
「夜明けっていうんだよ。君の名は太陽が生まれるって言う意味なんだ」
「なぜ死にゆくときにそんな言葉を私に？」
暗黒の宇宙空間に捨てられるカプセルの中からシルバーは必死に話かけた。
「人間はいつか死ぬもの。それが遅いか早いかどちらかにすぎない。だから僕らは愛するということを覚えたんだ。君は死という意味を知らない。よって、生まれるという意味もわからない。そのままでいいの？ずっと死んだままで生きていくそんな状態で。幸せの意味も知らずに」
「しあわせ？」
「僕は幸せだよ。愛する人と結婚できたから」
「愛する、、、？」
「愛されなければ、愛することはわからない。愛さなければ、愛されることもない。僕の恋人がいつか言っていたことばだよ」
シルバーのテレパシーはそこで途切れた。
なぜなら彼ののせられたカプセルが閉じられ、ガニメデの宇宙に葬り去られたからだ。暗黒の星たちのきらめく宇宙に。
愛する人と結婚できたから。
それはなにを意味するのか。
人間は感情を機械の我々に与えてくれた。だが、やさしい風のような心と気持ちは、教えてはくれなかった。

白いカプセルは青と藍の混じった紫がかった暗闇の海に、木の葉のごとく舞って消えていった。

「占い師たちのコロニーはあそこか？」
ブラックが指差すところに、青くゆらめく空間が暗黒の宇宙に浮かびあがって見える。
ガニメテから少しはずれた空間にあるその要塞は、通常の人間もしくはアンドロイドたち機械にも確認不可能で、現実には透明化されている。
「そうです」
バラードが頷いた。
「１５０人ほどしかいませんが、みな、我々と同じ、エスパーです。通常の機器操作に宇宙船の力は必要ありません」
「ではそこにこれを、われわれの意識のみでこれ（船）を運ぶが途中、助けを呼んだ、あいつを拾っていこう」
「、、、みつかったのですか？」
「ああ。追っての追跡が途切れるギリギリまで我慢しおって、、、。守りもあそこまで強くなると困ったもんだ」
だが、切れあがった瑠璃の双眸に、ほっとした安堵感が表情にあらわれる。口元がなんとなく、微笑している。
「気を失ってはいるが、命には別状なさそうだ。だが発見したらすぐに薬物を解毒させる」
「薬物ですか」
「あいつ、歯止めがきかん性格だからな。くせになって中毒化するにきまっている」
「そりゃ怖いですな」
レオンとバラードは肩をすくませ、顔を見合わせた。
連絡すると我々が危ないから。追手がすっかりあきらめるまで、宇宙の底に沈む方法をとるという、もと天使族のシルバーに、なかば

あきれながら、あいつらしいと感心もする二人であった。
「バーミリオンＧ－００８Ｒは一体ではない」
背後の二人に呟くと、ブラックは、「意識集中」と言い放ち、宇宙船の全ての電源をオフにした。辺り一面、闇に包まれ視界はすべて消え去った。

なぜ、夢があたらなかったのかしら。
ベビーピンクのやわらかなウエーブのかかった長い髪。燃えるような紅い瞳のルビーは、天王星にテロをしかけたバーミリオンの行動を予知夢できなかったことを悔いていた。
夫、レオンハルトはずっと、太陽系連合ジュニアに付いて土星の衛星タイタン付近にいる。占い師たちの集団にルビーも招かれて、彼らの住みか、宇宙船基地Ｇ－１０２にいた。基地は、ＥＳＰ波により、透明化され、あらゆるレーダーから逃れている。物質的に数値であらわせない非科学的なものを、敵アンドロイドたちは見抜けない。
今まではそうであった。バーミリオンが現れるまでは。
「ジュニア夫人のカプセルがみつかったそうよ」
一緒に基地に呼ばれたマリアが囁いた。金髪の長い髪をポニーテールにし、紅いリボンでとめているのが可憐な少女だ。二人は基地の司令塔にいた。窓の向こう側には、紫青が暗黒にとけこんだ宇宙空間と、無数の星々のきらめきが見える。
「みえるわ」
テーブルに座る薔薇色の長い髪のルビーは、目の前の計器類をみつめ、透き通った白い頬を、ほっそりとした長い指先で頬づえをつきながら、微笑した。軍服姿でも二人はまだ１６、７のまだ幼い少女たちだった。
「あのカプセルで眠っている、シルビアの貌、素顔はほんとに瓜二つなの。わたしと」
「えっ？」と、となりで計器類を操作しモニターを眺めるマリアが

驚いて振り返る。
「ジュニア夫人のことよ。私と双子姉妹なの。レオンハルトにきいたんだけど」
「レオンハルト少佐はもと、ジュニア宅の執事だったんでしょう？」
「そうよ」
ルビーの表情は心なしか曇って見えた。マリアは相手の複雑な胸中には気づかない。
「ふうん。でもあなたは、サイボーグだから年とらないものね。少佐もだけど、理想のカップルじゃない？永遠にそのままなんて」
「そうでもないわよ」
ルビーの受け答えを謙遜と取ったマリアは、仕事に戻った。アンドロイドたちの動向を、占い師と呼ばれるエスパーたちは、太陽系連合軍の司令塔でも別格扱いをうけている。その中の1人として招かれたルビーをマリアは上の者として、敬遠しながらも、多少憧れに似た感情を抱き始めていた。予知夢という占いに近いロマンチックな能力。それを持つ愛らしいスピッツ犬にも変身する現実をかけはなれたピンクの髪に、夢のような憧れを感じる程度のものっだったが。
だが、現実のルビーの心は、おだやかではなかった。
なぜ、はずれたのかしら。私の見た夢は金星が破壊される夢だった。その夢を、もしかしたら、見たくはなった真の気持ちが、自分の心の奥底に住んでいたせいなのかも。
見たくはなかった夢。その箱の扉をあけるのが、とても怖い。

「目が覚めたか？」
見慣れた顔がすぐそばにあった。メインコンピューターールームだった。そうか、助け出された後、ここで少しの間、眠っていたのか。
いくつか質問を受けて、自分は確か、答えていた。ブラックとその

仲間たちが、周りにいた。
「おまえの深層心理から読み取った。伝えてくれて助かった。これで、太陽系の救いの道が開けるだろう。解毒剤を点滴中だから、少しぼーっとするかもしれないが、すぐ治るから」
「ありがとう。ごめん。いつも迷惑ばかりかけて」
「無事でよかった。敵の思惑がわかったから、これから防衛態勢に入る。おまえは休んでいろ。これから、ハレー彗星が金星に進路を変えてぶつかるのを防ぐんだ。やつらは攻撃をしかけてきた」
「攻撃、、、？」
「金星が消滅するときの余波はおそらく地球まで相当量の影響を受ける」
「戦争になったってことか。お互いに攻撃し合う前に話し合いくらいできなかったのかな？」
「いきなり何言い出すんだ？おまえ、あいつに殺されかけたんだぞ。俺達は遊んでるわけじゃないんだ。話し合いができる相手なら、苦労はせん。暴走車相手に言葉が通じるか。相手は狂った機械たちだぞ。次は金星ごと爆破すると、予知軍の占い師たちが、予言したんだ」
「前回はずれたくせに。ガセだよ、きっと。そんな夢占いなんて非現実なもん、あなた、一番バカにしてたじゃない」
「先ほどハレー彗星に、奴らはメガ爆弾をしかけて、進路を変えたそうだ。金星に、１２時間後にぶつかるそうだ。占い師たちの予言通り、我々は敵軍から警告を受けるまえに、透視装置で調査した。」
「全てのエネルギー源はブロックされてるはずじゃなかったの？」
「地球連合軍主席が、予備基地を教えてくれた。こういうときのためにいつも用意していたそうだ」
「こういうときだけ、親だから頼るのは、お義父さまに悪いと思わない？」
「頼ってるわけじゃない」
「彗星ごと爆破するの？」

大昔のなにかの映画で見たなあ。それも1つや2つじゃない。こういうパターンって最後どうなるんだっけ、、、。たしか、、、。
「そうだ」
「どうやって」
「いいかげんにしろ」
ブラックは露骨に不機嫌になると、怒鳴りつけた。
「ヘリクツばかり言って。これ以上、俺を、混乱させるな、、、おまえはまだ目覚めたばかりだから、少し休みなさい。解毒剤も効いているから、もう大丈夫だ。レオン」
「はい」
「コンパートメントルーム8につれていってくれ」
「わかりました」
シルバーの横たわる簡易ベッドを押して、紅の軍服のレオンハルトは姿を消した。ルビーの心中はおだやかではない。なぜ、自分には一言もなく、簡単に彼女の執事のごとくふるまうのだろう。もう解雇されて1年以上たつというのに。
それが嫉妬だとしたら、本当に自分はサイボーグ犬ではなく、真の心は人間だという証なのだろうか。

部屋についてからレオンはシルバーをベッドは移動できるタイプなので、それごと脇の壁に寄せ、「お気分は大丈夫ですか?」と尋ねる。
やわらかなオレンジの照明の、小さなテーブルとベッドだけの簡素な休息のための仮眠室だった。
「もう、あなたは僕の執事じゃないんだから、そんな敬語使わないで」
「死ぬまであなたのしもべです」
「違うよ」
シルバーは眠たげに脇の椅子に座り、心配げに見守るレオンの手を、

点滴側でない方の指先で握りしめた。
「レオン。僕はずっと前から知ってるんだ。あなたが人間だってこと」
レオンの琥珀色の大きな瞳が見開き、驚愕するのを見て、シルバーはドキリとした。
「いつからですか？」
「あなたがハイト家を出て行った日に」
「、、、そんな」
「僕が愛しているのはブラックだけだ。だから、あなたはいつまでも僕の心の中では愛犬であってほしい」
いっとき、困惑した表情の後、レオンはいつものような穏やかな表情にもどり、静かに微笑した。
「私にとっては永遠にあなたは小さな坊ちゃまです」
レオンの手をそっと放すと、シルバーは緑色の透明な瞳を大きく見開き、懇願した。
「ルビーに会わせてくれない？」
「今、ですか？」
「うん。お願いだから」
レオンハルトは身を翻し、メインコンピュータールームへと消えて行った。

「なぜ泣くの？」
かなり朦朧とした意識下で、ピンクの髪がゆれているのが見える。
少女は泣いていた。両手で顔を覆っている。はじめて真近で見たが、髪と目の色を除けば、その顔はシルバーと瓜二つだった。
「だって、、、」
ルビーは顔を覆う手を離すと、シルバーに、真紅の薔薇のような瞳を向け言い放った。
「私、あなたの代用品だもの」

「、、、それは違う」
「違う？」
「レオン、誰にでもやさしいから」
「誰にでも？」
「うん。僕に親切なのもそのせいだよ」
「そういうこと？」
「レオンが一番好きなのは、君だよ。誰が一番なのかっていうのが、一番大事なことでしょ？」
シルバーは、まだ、解毒剤の作用がきちんと行きわたってないせいかもうろうとしたまま、簡易ベッドからまだ起き上がれないので、言葉だけを続ける。
「レオンにとって僕はほんものじゃないんだ」
「ほんもの？」
「レオンがみているのはほんとうの僕の姿じゃないから。彼はほんとの僕を知らない」
「どういう意味？」
ルビーはシルバーの手を取り、そのエメラルドの澄んだ双眸を見つめた。深く吸い込まれるような透明な海底のような。魔性の翡翠（みどり）色を。
「レオンハルトが、人間の脳を持つサイボーグ犬だってことを、僕はずっと前から、わかっていた」
一瞬、握られた手から緊張が伝わり、ルビーの体が硬直するのをシルバーは感じた。
「僕は、心の中に彼を犬として思うことを誓い、これからもずっとそうするつもりだ」
「なぜ？」
「僕が真に愛する人はブラックだけだから。レオンが見ているのは理想の僕なんだ。僕は本当に愛する人にしか真の心をみせることができない」
「そんなことないわ」

「そうなんだ。だから誰にでもやさしい、と言われる。レオンも僕と同じなんだ。だからルビー、レオンが本当に必要とするのは、君なんだよ」

「必要、、、？」

「完全なヒトなんか１人もいない。僕たちはお互いに足りないものをおぎないあうことが必要なんだって、ブラックが言ってた」

「おぎないあう」

ルビーはレオンのときおりみせるさびしげな貌をおもいうかべた。わたしはあの人をおぎない、幸福にすることができたら、、、それが希望なのかもしれないと。

４つのダイアモンド地点

敵の本拠地が、月の裏側にあることを、占い師たちは予言した。そのことを、彼らのＥＳＰ遮断波動により、ブロック解除して見つけた調査局と太陽系連合軍は、１２時間後、ハレー彗星が金星とぶつかる直前に、破壊攻撃を開始した。彗星には同時に別の爆撃機を、遠隔操作により向かわせている。

「ルビー」

レオンハルトは、薬物治療中のシルバーの待機する部屋からメインルーム（管制塔）に帰ってきた彼女に、笑顔で迎えた。

「うまくいきそうだよ。君と、あの占い師たちの予言が、こんどこそ、実態として現実化したんだ。数値的にも正しい」

「レオン」

ルビーは人目も憚らず自分を抱きしめる夫が愛おしく思えた。この人は誰にでもやさしい。それが、この人の長所なのだ。

そう思うことにしよう。

ルビーは一瞬、目を閉じた後、レオンに、あることを告げた。

「あのね、私、みえたの。金星にハレー彗星がぶつかる瞬間、地球がこなごなになる夢が。４つのダイアモンド地点がつながると地球は滅びるって。彼らはそう呼んでいるの」
レオンは驚き、、ルビーの紅い目を見つめた。
「４つのダイアモンド地点?ほんとか?なぜなのか、説明できるか?」
「私にも現実なのか信じられない。アンドロイド軍は、多くのロボットも従えて、地球に４つの地下要塞を造り上げてる。それもエジプトのピラミッド、日本の仁徳天皇陵、マヤ遺跡の天文台、アンコールワット遺跡の地下に。地下基地が見えるの」
地球空洞説という言葉をレオンハルトは思い出していた。まさかそんなおとぎ話のような世界を。彼ら、機械たちはつくりあげたというのか?
「まさかその４つの要塞がシルクロードのように地下でつながっているなんてことはありえない、だろうね?」
「地下では繋がっていないけど、お互いにリンクするシステムになってるの。レオン。彼らは自分たちの造った地下基地になんの未練も持たない。金星を消滅すると同時に、地下要塞ごと地球を破壊し消滅して、自らは宇宙に脱出する計画になってるの」
レオンは蒼白になり、ブラックのもとにテレポートし、消え去った。たったいままで抱きしめられていた腕は、任務のため、去って行った。
レオンらしい。ルビーは満足だった。彼は私の夢どおりならば、このまま銀河に君臨することとなる。私は永遠に彼に寄り添っていこう。
それはもう1つのルビーの願いでもあった。
基地内の全員が、これからの事態に備えて再び結集され、統括するハイト調査局長自身、やらなければならないことは、天文学的数値にまで膨れ上がっていく気分となった。
―こんなことしていられなかった。なんとかして金星と地球の４か

所の地下要塞のリンクを解かなければ。
解除の方法はどうすればー
「あの機械ども、全てが落ち着いたら、奴隷化してやる」
心に悪態をつきながらも常に心は戦闘状態の彼は、表面は、ポーカーフェイスを崩さず、冷静沈着ぶりはあいかわらず、まるで、戦いを楽しんでいるかのごとく、過去に「連邦軍の黒豹」と讃えたまわりには、見られてしまうのだった。

―ごめんなさい。
テレパシーが心に届くのに気付き、彼は目を疑った。
暗黒の空間に1隻の小型艇が飛んでいく。宇宙の闇に浮かぶ白鷺のように。
「、、、あいつ、、、、！」
指令室で、ブラックは頭をかかえ、誰かあいつをつれもどすか、援護して、詳細を知らせてくれという前に、「私が行きます」とレオンが進み出た。
「おまえが？」
「地球連合主席のもとからたった今アクセスされました。坊ちゃまはそこに向かわれています」
「、、、そうか。シールドを張って向かってはいるが心配だ。よろしくたのむ」
「了解いたしました」
レオンは踵を返し、指令室を後にした。
が、突然、引き返すと、ブラックに近寄り、「だんなさま」ともと執事時代に戻って囁いた。
「なんだ？突然、、、」
「大旦那様からのことづけです。坊ちゃまは地球に到着後、ブレスレットをはずすよう命じられています」

「なんだと?」
ブラックはレオンを呼び、さきほどとは全く別のことを命じた。
「おまえ、俺の身代わりになれ」
「了解いたしました」
レオンは嬉しそうに、だが、いつものポーカーフェイス微笑を浮かべた。

「どうだね? 気分は」
「とてもいいです。お義父さま」
シルビアに戻ったシルバーは淡いアクアブルーのドレス姿だった。光に透ける銀色の髪、透明な白い頬に長い睫に縁取られるエメラルドの双眸の、ほっそりとした少女は、銀河宇宙に咲く純白の薔薇のようだった。
太陽系連合主席ロック・ハイトは、来客用ルームでなく、プライベートの指令室に他人をいれることを滅多にしない。やわらかな銀色のライトの灯りのもと、モニターを操作し、指令しつづける手を止め、青いケープをすっぽりとかぶった頭部=貌のない男は、低くはりのある声で穏やかに話しかけてきた。
「具合がきちんと良くなる前に急に呼び出してすまなかったね」
「いえ、いいんです。私でお役に立つことがあれば、なんでもおっしゃってください、お義父さま」
「金星が心配でね。もと女房が住んでいる」
朝霞野夜博士のことをいっているのだ。まだ、愛している、目の前のサイボーグはそう言っている。
「息子は、、、あいつ、わがままだろう?」
「私にはもったいないくらいの素晴らしいひとです、彼は」
「ありがとう。よろしくたのむよ。レオンハルトが今、ここに到着した。4つのダイアモンドは、太陽系連合軍のサイボーグとエスパーたちが、今、リンクシステムを解除しに向かっている。ハレー彗星の方はブラックたちが、今、進路変更させたそうで、なんとかな

りそうだ」
「進路変更？どうやってさせたのですか？」
「バラード・レインとディーン・レイクが、占い師たちとともに、彗星の進路にエネルギーＥＳＰ集結体を造り、ぶつけてみたそうだ」
「エネルギーＥＳＰ集結体、、、」
「なんでもルビーというヒューマノイドエスパー犬が、指導して行ったそうだ」
「、、、そうですか」
「そんな顔して。おちこむことはないよ。君はあいつをここまでの男になるまで導いてくれた。それになにより、あいつを幸せにしてやってくれた。これからも頼むよ」
「わたし、なにもしてません」
「きみのサイコブラスターとしての力も必要なのだ。だからこの地球に呼び寄せたんだよ」
ロック・ハイトは温かな人柄だった。ときおり、かんしゃくをおこす、感情の起伏の激しさも見せるとブラックから聞いたが、シルバーにとってはただ、やさしい穏やかな夫の父であった。

真紅の宇宙艇が到着したという知らせに、シルバーはプライベートルームで待機していた。真紅＝レオンハルト少佐の小型艇だ。
ドアノックの音に、「どうぞ」と言うと、部屋に入ったのは、思いがけぬ人物だった。
「おい、大丈夫か？」
「来てくれたんだ」
「ブレスレットをはずすと聞いたからには、俺じゃないとだめだろう？」
「、、、それだけのため？」
ブラックは瑠璃色の双眸を和らげ微笑した。
「おまえが１番大事だからだ」

「私も」
二人は抱きしめ合い、キスした。パートナーだというのに人目を気にしなくていい、逢瀬は久しぶりだった。

地球はその機能を停止し、ひっそりと静まり返っているかのごとく呼吸してないかのようだった。全てのエネルギー供給をブロックされた人々が、夜明けを迎えるのはこれで2週間目となる。
彗星は昨夜、無事除去されたが、生活機能が無事にもとに戻るのはいつの日だろうか。

４つのダイアモンド地点の焦点を、二人はみつけた。それは大西洋に浮かぶイースター島沖合いの「魔の三角地点」という、さまざまな魚船、飛行機などが1千年過去の頃、謎の消失を遂げた魔境でもある。その海底都市が、彼ら、3体のバーミリオンＧ－００８Ｒタイプを指導者とするアンドロイドたちの結集地でもある。

真紅の小型宇宙船を、透明化したまま、その上空にワープした二人は、
下界を見下ろした。
銀色のブレスレットをはずした右手を、彼女は頭上に掲げた。宇宙艇の硝子窓から見つめる藍の海にはなにも見えない。
左手に握った彼の掌があたたかかった。その手首には瑠璃の填め込まれたブレスレットが見えた。
「これでいいのかな」
「いいも悪いも、ここまできたらしかたないだろう?」
「もし、暁が助かったら、思考操作しなおして、ともだちになれないかな?」
彼は、ゆっくりと、穏やかな笑みを浮かべ、
「まあ、それくらいなら、できないこともないか」

と、彼女の肩を抱き、そっと口付けすると、
「なれるさ、きっと」とささやいた。

西暦３０８９年1月

シルバーはバーミリオンGアンドロイド軍の本拠地を消滅させ、他の多くのアンドロイドとロボットたちの洗脳を解いた。サイコブラスターの力をセーブすることがはじめて可能となり、その力を世の中に知らしめた瞬間でもあった。

地下基地5箇所を破壊することはせず、あえて本拠地だけ狙い、すべての洗脳を解除できた理由とは。
バーミリオンは3体だが、暁は一人しかいなかったからだ。洗脳主は暁一体のみだった。
だが、シルバーは本拠地にいた3体とも機能停止させたが、破損させることはなかった。
彼らは思考回路を操作し二度と人間に刃向かうことないように作り替えられた。
生まれ変わった彼らは再び、ロボット3原則を踏まえた優秀製品として再び売られる商品と還った。
感情を持つアンドロイドバーミリオンG－００８暁だけはだだ一人、ある場所に戻ることを極に希望した。
その願いを特別に受け入れたのは、意外にも太陽系連合主席のジュニアだった。

「御手洗潤博士を殺したのか?」
「いいえ。私が、その御手洗です」
「なに?御手洗の分身が私です。私は彼のレプリカなのです」
御手洗潤博士はアンドロイド暁に自分の理想世界を教え、押し付け

た。「博士は自殺しました。その直前、全ての人類が幸せになるには、一度全てを清算すべきだと私に遺言を残して」
「キチガイ博士だな。ありえない世界だ」
吐き捨てるようにいいはなつブラックに、暁は答えた。
「私もそう思います。博士は私に愛情を与えてはくれませんでした。だから1人で私を置いて死んでしまいました」
その暁の答えに、なにか考えがあるのか、ブラックは少しだけ予定を変更したのだった。

3089年3月　天王星　夢水晶の館にて

「今日は占いのお客としてじゃなくて、1個人として会いに来ました」
「却下ですな。お客様に恋愛感情を持ってはならないという規則です」
マリアは豊かに背まで伸びた金色の髪を今日はポニーテールでなく、トップにリボンをつけてはいたが、そのまま垂らしていた。人間の男性なら、「今日は髪型かえたんだ。かわいいね」くらいは言うのだろうが、なにせ相手はロボット＝アンドロイドである。
「ジェイク」
「はい」
「店長にはそれなりのお金を払いました。今日1日私の好きにさせて」
「好きに、というと」
「、、、えーと」
実はマリアにもどうしてほしいのかうまく説明ができない。シモベというのはあまりにもロコツだし、私はシルバーとレオンほど無神経な関係にはなれない。この場合、自分のことを棚に上げのマリアは自己中だし、無神経きわまりない少女のはずなのだが。

「なぜですか」
「はっ？」
「なぜマリア様は私を指名なさるのですか」
「、、、それは」
マリアはジェイクの銀白色の整いすぎた貌と金色に近いオレンジ肩までのびた髪に指先でさわりながら、バーミリオンの朱に輝く、やさしそうな瞳をみつめた。
「ジェイク、私、今日訓練高校の卒業式だったの。１８になったから、結婚もできる。だから」
「どのようなご用件でしょう？」
きちんと説明しないと機械には伝わらない。マリアは、意を決して、言い放った。
「あなたが好きになってしまったから」
「好き？」
「あなたがわかってくれるまで、私待ち続ける。そういう感情を私が教えてあげたいの」
マリアがはじめて自分以外のひとに、そのような想いを持ったのは、アンドロイド「暁」のタイプ、ジェイクだったのだ。人間とアンドロイドの恋。それは現実にありえるのだろうか。だが、それから、はじめればいい、
マリアは困惑する表情の温かなオレンジの瞳に願いをかけた。

了

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8277y/

バーミリオン（暁）

2011年11月24日19時11分発行